Aspect of Rudolf Hilferding Research: I talk about the book that I published recently

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2017-10-03 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/2297/34326

ヒルファディング研究の視点

―― 自著を語る ――

上　条　　勇

はじめに

本稿は，ポストマルクス研究会第19回研究会(2012年3月28日～30日，岡山大学)の第3セッション「ヒルファディング研究の到達点」におけるリプライのために用意した原稿を若干の修正の上発表するものである。このセッションでは，拙著『ルドルフ・ヒルファディング ―― 帝国主義論から現代資本主義論へ ――』(御茶の水書房，2011年)のほか，倉田稔『ルードルフ・ヒルファディング研究』(成文社，2011年)，中田常男『金融資本論と恐慌・産業循環』(八朔社，2011年)が報告に取り上げられた。そしてそれぞれについて恒木健太郎，内田博，河西勝の三氏が報告を担当された。

Ⅰ　自著を語るにあたって

この度は，ポストマルクス研究会において拙著を取り上げていただきまして，どうも有難うございます。報告者はこの400頁を超える「大著」を読んで報告をまとめるのは大変だったと思います。出席されている他の方々も理解するのが大変だと思い，このリプライ用の原稿「自著を語る」を用意しました。

この自著を語る場合，どうしても言及せざるをえないのは，大学出版助成に応募して拙著が不採用になった時に通知されたコメントです。今日はこのコメントを批判すること自体を目的にするのではなく，自著を語る上での手がかりとしたいと思います。というのは，このコメントは，本書の成り立ち，

視座，問題意識，特徴など重要なポイントで著者が思いもしなかった受け取り方をしていて，そして意外と微妙な点もついているからです。コメントでは「ご参考になれば幸いです」と最初に書いてありましたので，文書の性格上全文は公表できませんが，本日自著を語る上で大いに参考にしたいと考えています。

このコメント文は，ヒルファディングと帝国主義論史に関して専門外の読者が，拙著の元原稿をどのように見たのかの一例を示してくれます。ヒルファディング研究者ならば，対象にのめりこんで，細かなことにこだわり，その意義と興味深さは自明のことと受け取ってしまうのではないでしょうか。しかし一般の読者のなかには，今何でヒルファディングなのだろうかと，素朴な疑問をもつ方もいるのではないかと思われます。今この時点で拙著を出版する意義は何か。これに関連して，コメント文の最後の方でこう書いてあります。

> 「……主題として限定的であるといわざるを得ず，読者層は相当に限定されていると予想される」。分量も多すぎ，「応募者の『研究の集大成』という点からみても原稿量の削減を含む大幅な改稿を想定し難い。」したがって「本助成制度利用によっても，刊行・市販の実現は困難であるものと考えられる」。

コメントは，本書の主題が「限定的」すぎると見ているのですが，わたし自身は，なるほどヒルファディングという人物を中心としていますが，内容からいって経済学ひいては社会科学の広範な領域を対象としているつもりです。それにしてもまさか「専門書」の出版助成において，主題が「限定的」であるとして不採用になるとは思いもしませんでした。このように言われると，ヒルファディングの恐慌論・景気循環論に的をしぼっている中田氏の著書はどういうことになるのでしょう。「読者層は相当に限定されている」と言われていますが，衰えたりとはいえ，我が国ではまだヒルファディングの名前は知られており，少しは拙著に関心をもつ者もそれなりにいて，助成付きで専門書として出版する要件を満たすほどの読者は確保できるのではないでしょうか。「市販の実現は困難である」と書いてありますが，これでは，本書の出版を即決で快諾してくれた御茶の水書房の橋本盛作社長の判断があまりに無謀だっ

たということになってしまいます。

また大幅な改稿は「想定し難い」と一方的に判断されましたが，わたしは，助成の申請から審査結果を得るまで2カ月以上の待ち時間がありましたから，科研費の報告書としてオットー・バウアー小伝と文献目録を作成する傍ら，原稿の手直しにすでに着手していました。それで不採用通知があった後にそれほど時をへずして，すなわち3月に入って完成原稿を仕上げ，すみやかに御茶の水書房に出版をメールで依頼することができました。忘れもしない東日本大震災が起きた3月11日に橋本盛作社長から電話があり，「よかった，電話が通じた」という声があったのを鮮明に覚えています。

本書では，原稿の推敲を重ね，より読みやすいように文章をかなり手直ししました。応募原稿において冒頭の一節をなした研究史を最後に移して補論にしたり，ほかの2，3の節でも場所を入れ替えたりするなど構成の点でも変えました。また終章の(1)と「あとがき」はまったく別物に差し替えています。繰り返しと思われる部分を削除するのみでなく（その結果，応募原稿の第4章第5節，第5章第1節は節の体裁をなさなくなりました），まるごと削除した節もあり，分量の点でも5，60頁ほど削減しております。わたしが今まで書いたもので，これほど時間をかけて文章の推敲を重ね，構成と内容を手直ししたものはありません。その結果「社会科学の作品として」の完成度がより高くなっていると自負さえしております。

それにしても，先のコメント文を読んで感じざるをえないのは，我が国でこんなにマルクス主義に関する研究意義がすたれ，それとともにヒルファディング研究の意義がすたれたのかという感慨です。コメント文の中頃に「20～30年前に出版されておれば，十分に意義あるものとなったのではないか」と書かれています。つまり今日では拙著の出版「意義」があまりないものであるという話になります。このような評価が下されていますから，本日における「ヒルファディングの検討会」では，今日拙著を出版する意義はどこにあるかが改めて問われます。報告に対するリプライのために用意したこの原稿では，この辺のところを意識して述べて行きたいと思います。

II　本書の成り立ち

本書は，現在のわたしの問題意識と認識水準で書かれ，ヒルファディングにおける「帝国主義論から現代資本主義論へ」の展開を学説史的に明らかにするという統一的なテーマを設定しています。材料として利用した論文を文章のみならず内容の点でも大幅に改正し，統一的なテーマにそって叙述を整理しているという点では，まったく新しい独立の研究書です。過去に書いたものを利用していますが，これを寄せ集めて「接合」した論文集では決してありません。応募原稿の「あとがき」に詳しく書きましたが，本書の作成に利用した論文は，1970年代後半に発表したものと2000年代に発表したものの時期的に二系列のものからなります。第2部はすべて前者からなります。前者は結局本書の半分ほどを占めます。この「あとがき」では，どれをどのように利用したか，あるいはどのように改変したかを具体的に書いてあります。しかし，およそ30数年前の論文を利用していることをあまりに正直に書いたせいか，例のコメント文の最初では本書の目次にわざわざ利用した論文の発表年を括弧書きで示され，古い論文と新しい論文がうまく「接合」されていないと，こう批判されることになります。

「上記に初出を示したが，1970～80年代に書かれた論文と最近執筆した，あるいは加筆した部分との接合関係に難がある。硬いながら緻密に書かれた前者に対して，現代資本主義への接合を意識して加筆された最近の文章との間に違和感がある。」

正直に言いますと古い論文は，スキャナで一度パソコンに取り入れて利用しています。その際，かなりの読み取りミスがありまして，本書作成にあたってミスを直すというより，新しい文章に変える作業をぼう大な時間をかけてしておりました。文章上の加筆はむろんのこと，内容上の変更もおこなっています。もちろん新しい論文についても，文章上の統一をほどこすために，訂正をおこなっています。応募原稿では，後に述べるように，とくに第2部の2，3の節の加筆部分および書き下ろしの最終章でくどい箇所や重複部分を残していましたが，これを是正し，出版にいたるまで推敲を続け，とくに古い論文の文章は全面的に書き改めています。文章上の「違和感」が残るかどうかは読者の判断を待つしかありませんが，本書の献本に対する返礼の手紙

で，とくに第2部について文章が平易で読みやすかったという感想を述べてくれた方もいます。コメントに懲りましたので，本書の「あとがき」では初出一覧をせず，かわりに一言「古い論文もいい論文はいい論文で，まるで旧家のけやきの柱を削りなおして新築の家に再生利用するような気持ちでこれらを利用した」と臆面もなく述べておきました。

確かに本書の統一性と体系性を示す上で章別構成に必要なので，古い論文で使えるものを「材料」として利用しましたが，その際大幅な変更を加えています。中間的に発表した拙著『ヒルファディングと現代資本主義 —— 社会化・組織資本主義・ファシズム ——』(梓出版社，1987年)で示した現代資本主義論に関するわたしの基本的構想は変わっていませんが*，グローバリゼーションという現代資本主義の発展も現実に進んでおり，これを多少考慮せざるをえませんでした。またかつて否定的に見ていた西欧社会民主主義を再評価するなど社会変革を考える上でわたしの考えはかなり変わってきております。だから第1章第3節の作成に利用した論文などは，評価の姿勢の点でも解釈の点でも納得がいきませんでしたので，原型をとどめないほど変えており，まったく新しいものに置き換わっています。ちなみに意外かも知れませんが，本書で自分が一番気に入っているのはこの節です。初出論文の原型をわずかにとどめるにすぎない形で大幅に改稿したものとして，本書第6章もあげておきます。この章は，社会変革の問題でヒルファディングがたどった苦難の歩みにかなり共感を覚える形で書き直しております。以上，本書は古い論文と新しい論文の「接合」そしてそのための加筆をしたのではなく，古い論文がそれ自体として独自の存在価値を残していると言えるほど，文章の点でも内容の点でも古い論文の全面的な改訂の上に成り立っています。

＊　ここで敢えて述べておきますが，拙著「ヒルファディングと現代資本主義」においても，ヒルファディングの「組織された資本主義」論については大きく取り上げられています。本書第2部とその違いは，1987年の拙著が史実に即して時系列的にヒルファディングの考えを紹介していったのに対して，本書がこのような時系列的な叙述の仕方をとらず，「組織された資本主義」論の理論的性格を浮き彫りにするという理論的視点に立っていることにあります。

Ⅲ　ヒルファディングを現代(現在)に直接適用？

コメントは，古い論文を利用することによって生じた本書の無理とか破綻とかを強調する立場に立って書かれています。文章上の「違和感」のみでなく，研究上の姿勢と方法の無理とか破綻を示しているとさえ指摘しています。コメントを読みこんで，拙著の批判をおこなう上での次の二つの観点に気がつきました。

第一に，歴史的・時代的制約性のある研究対象を「現代」とか「現代資本主義」に「接合」して論じるのは無理である。

第二に，書かれた時の時代的制約性のある古い論文を現在の認識水準とか視点で利用するのは無理である。

コメントのこの2つの観点は，「はしがき」で示した「現代資本主義論に視座」をおいた「学説史・思想史的研究」をおこなうという本書の視点を「現代」とか「現代資本主義」にヒルファディングを無理して「接合」することを目的とするという意味で受けとめる誤解から生じています。あるいはこのような誤解をする読者がほかにもいるかも知れませんので，この誤解をとく必要があるでしょう。ここではコメントがどのような誤解を示しているのかを具体的に述べておきます。コメントはまずこう指摘しています。

> 「ヒルファディングの時代における『金融資本』と今日的な現象形態(産業資本を離れて独り歩きする金融資本)との乖離に鑑みれば，ヒルファディングの捉えた金融資本の歴史的規程性は明らかで，これを今日出版するにはかなりの読み解きが必要であるが，上記のように30年前に書かれた章ではその役割を果たしているとは言い難い」。

この文に続いて拙著の出版の今日的な「意義」があまりないと言うような先に述べた指摘がなされています。じつは，金融資本概念を取り扱った本書第2章，その元になった論文そして応募原稿でも，ヒルファディングの金融資本を現代資本主義分析に適用するのは有効でないと述べています。黒滝正昭氏が本書を読んでこれに気づき，意外に思ったと手紙に書いてきています。本書第2章の初めでわたしは，「本章では，『金融資本と信用制度』という研究関心から，ヒルファディングの金融資本を彼に内在して取り上げる」(本書，96頁)と，この章の目的を示しています。また第2章の最終節のタイトルは「金

融資本と『組織された資本主義』」であり，「組織された資本主義」論との学説史的なかかわりでこの章を論じていることを示しています。だから何で今日の資本主義に無理に「接合」するために「かなりの読み解き」をしなければならないのかわかりません。また，コメントにおける金融資本概念の理解も疑念が生ずるものです。「産業資本を離れて独り歩きする金融資本」というような表現は確かに今日一部に見られますが，「貨幣資本」（あるいは「利子生み資本」），わかりやすくは「生産実体から離れて独り歩きするマネー」と言うべきところでしょう。

以上のように，コメントは，「現代資本主義論の視座」に立った「経済学史的・思想史的研究」をめざすというわたしの意図を，あたかもヒルファディング理論が現代資本主義分析に適用できるかのごとき「読み解き」をわたしがめざしているかのようにとらえ，このためには30年前の古い論文を使うことは無理であるという指摘をしています。そしてそのために，現代における金融資本の有効性に関して，わたしの考えをまったく逆の形でとらえてさえいます。古い論文を利用する無理を示すことにこだわりをしている，もう一つのコメント文があります。

Ⅳ　我が国のヒルファディング研究に対するJ. コッカらの影響

「80年代前後にはJ. コッカらの研究を契機に日本でもヒルファディング研究が旺盛を誇ったが，これは当時の時代背景を考慮する必要がある。当時書かれたものを今日問おうとすれば，現代への接合を加筆せざるを得なかったと思われる……」。

コメントは，この加筆が無理であったと批判し，古い論文と「加筆」の「接合関係に難がある」と言うのです。確かに当時「組織資本主義」という用語が一時的に注目され，それとの関係でヒルファディング理論も現代資本主義分析にいきなり適用する意味で表面的に取り上げられました。しかし，本書補論のヒルファディング研究史を見ればすぐにわかりますが，我が国におけるヒルファディング研究がJ. コッカらの影響を受けて旺盛になるほど底が浅いものではないと言わざるをえません。わたしもJ. コッカらの影響を受けてヒルファディングに関する論文を書いたわけではありません。拙稿「経済学とわた

し ―― 激動の歴史とともに歩んで ――」(『金沢大学経済論集』第30巻第2号，2010年2月)で述べたように，1970年代初めつまりまだ学生であった時代からわたしの「組織された資本主義」論研究がはじまったのです。1973年に卒業研究の単位を取得するために提出したわたしの卒業論文のテーマは「組織された資本主義」論です。2年後の修士論文のテーマもそうでした。そしてこの修士論文の研究に基づき，わたしの若き時代の代表作とも言える，また本書第2部の作成に利用した連続論文「ヒルファディングの『組織された資本主義』論」を1977年から1978年にかけて発表したのです。その間ヒルファディング研究で注目されていた倉田稔氏が小樽商科大学に赴任してきたので，大学院生のわたしが小樽に出むき，倉田氏の研究室を緊張しながら訪問した記憶があります。我が国におけるヒルファディング研究は，マルクス経済学研究が旺盛だったのと連動して，マルクス経済学研究それに経済学史研究において独自の歩みをなしてきたのです。だから西独の比較社会史グループの研究そして宇野派を中心とした現代資本主義論の方法論争に遭遇した時，わたしはむしろ流行とは一線を画すという意味で，当時敢えてこう宣言しています。

> 「ヒルファディングの所論については，とくに学説史的研究の立場を強調する意図から，『組織資本主義』ではなく，『組織された資本主義』という用語を意識的に用いることにする」(拙稿「『金融資本論』と『組織された資本主義』論 ―― 方法論的考察 ――」北海道大学『経済学研究』第31巻第1号，1981年6月，121－122頁)。

この文言は，応募原稿そして拙著にもそのまま採用されています。わたしの論文(そして本書)は問題意識として学説史研究の独自の論理から書かれているのであり，安直に流行に左右されたものではありません。我が国における当時の流行は，わたしにとって，あまり研究意義が認められてこなかったわたしの「組織された資本主義」論研究の意義が突然認められたという感慨をいだかせてくれたくらいの位置づけです。わたしは当時むしろ比較社会史グループ(そしてこれを利用する大野英二氏ら)によるヒルファディング評価には批判的でした。大学院生最後の年の1977年にわたしは半年ばかりドイツ語の研修もかねてヨーロッパ放浪の旅に出かけたことがあります。この時，西独のビールフェルト大学にH.－U.ヴェーラーを訪問し，彼の「組織資本主義」の視点について批判めいたことを不躾かつ無謀にも話しました。すると，

ヴェーラーが「君の大学での地位は何か」と問いかけてきたので，わたしは「大学院生です」と答えました。それで会話は打ち切られ，その後，J.コッカがチューターをしているヴェーラーのゼミに参加することになりました。2カ月間ゲッチンゲンのゲーテインスティチュートで訓練を積んだのに学生のしゃべるドイツ語をあまり聞きとれなくてショックを覚えた記憶があります。ヴェーラーとの会見はこのように不本意に終わりましたが，その足でブレーメン大学にW.ゴットシャルヒを訪れた折，その研究室で偶然故星野中氏と出会い，星野氏に自宅での食事に誘われるなど非常に親切にされた楽しい思い出があります。

それはともあれ，当時わたしが確立していた研究の視点は，両大戦間期資本主義のいわゆる「相対的安定期」の一資本主義観および一つの現代資本主義論としてできるだけ資料に即して「組織された資本主義」論を研究するという経済学史的な立場にもとづくものでした。昔も今も，研究の学説史的立場を示すために「『相対的安定期』の一資本主義観」という言葉をよく用いています。そしてこの立場が「現代資本主義論の視座に立った学説史的・思想史的研究」という本書の視点を形成しています。当時も今もヒルファディング理論を現代に性急に「接合」することには批判的であり，まずは学説史的・思想史的な研究をおこなうべきであり，その上で学説史的・思想史的な評価の一環としてその「現代」的な意義と限界を問うべきであると考えています。

V　「現代資本主義論の視座」に立つとはどういうことか

コメント文は，「現代資本主義論の視座」に立つというわたしの研究の姿勢と方法を「現代」そして「現代資本主義」とヒルファディングおよびわたしの論文を「接合」するという意味でとらえ，この「接合」の無理を指摘しています。このような理解がどうして生じたのかと少し考えてみたのですが，そこにわたしとコメントのあいだに一種の認識のズレがあるのではないかと気がつきました。

コメント文は，どうも第二次大戦後を現代としてとらえて論じているようです。そしてしばしば現在とか今日に近い意味で現代という言葉を用いてい

ます。それに対してわたしは，後述のように，確かに現在に近い意味で現代を用いることも多少ありましたが，たいていは通例にしたがってロシア革命後ないしは第一次大戦後から現在までを現代としてとらえています。だから両大戦間期のヒルファディングの思想も「現代の思想」として位置づけており，彼の「組織された資本主義」論も一つの現代資本主義論を意味するととらえています。本書では，現代資本主義論の学説史においてヒルファディングの「組織された資本主義」論を評価し，この「組織された資本主義」論との関連で『金融資本論』を学説史的に解釈するという基本的な視点に立っています。それだけに何で「現代」と「現代資本主義」と無理な接合，それから生ずる拙著の破綻を批判されなければならないのか，コメントを読んで最初は理解できませんでした。そしてコメントを読みこんだあげく，コメント文とわたしの以上の認識のズレに気がついたと言えます。だから本書の「あとがき」では敢えてこう述べておきました。

> 「現代資本主義論の視座にたった帝国主義論の経済学史的研究が本書の特徴をなす。その意味は，『組織された資本主義』論を一種の現代資本主義論（過渡的理論）として経済学史に位置づけ，『金融資本論』から『組織された資本主義』論へのヒルファディングの思想的発展を帝国主義論から現代資本主義論への展開としてとらえることにある」（本書，397頁）。

読者は著者が思いもしなかったような受け取り方をすることがある。このことに気づかせてくれ，誤解なきように本書の改善に向かわせてくれた点で，わたしはコメントに率直に感謝したいと思っています。次に，コメントにおける誤解は，現代という用語の問題に尽きるのではなく，さらにわたしの学説史的な立場にからんで重要な論点から生じているということをより詳しく取り上げます。あるいは，この点，今日の報告と討論でも問題になるかも知れません。

Ⅵ　経済学史研究の方法をめぐって

経済学史研究の方法として，本書の「はしがき」で簡単な次のような記述をしておきました。

「……ここで我々に問われるのは，現代の観点にたって過去の学説と思想を裁断することではない。絶えず反省され鍛えられる我々の『新たな認識水準』のもとで，それぞれの時代と社会に生きた学説・思想として，これらを史実にもとづいてできるだけ正確に把握することを心がけると同時に，時代的制約を超えて現代と未来を照射するその理論的可能性を見いだすことである」（「はしがき」iii頁）。

このようにわたしは，学説史とりわけ帝国主義論史研究において，「二重の視点」に立つべきことを強調しています。その意味は，まず史実に即して詳細に検討した上で，さらに理論的な意義と限界を簡潔に問うという二段構えの姿勢にあります。コメントでは現代への「接合」の無理が指摘されていますが，本書は現代資本主義論の理論研究ではなく，あくまでも学説史研究の本ですから，ヒルファディング理論の時代的制約性を踏まえた上で資料とテキストの解釈に徹し，その上で現代（および今日）の視点からも学説史的な評価を加えています。ただ，「新たな認識水準」と「現代と未来を照射するその理論的可能性」の問題に関するわたしの言及が，例のコメント文の受け取り方に結びついていると思われるので，もう少し説明を加える必要があるでしょう。

まず「新たな認識水準」についてですが，確かに古い論文を書いた頃と本書ではヒルファディングを評価するわたしの姿勢が変わっています。つまり，わたしはいわゆる「大学紛争世代」ですから，若い時はレーニンの影響をかなり受けています。社会民主主義者を裏切り者とか日和見主義者と見なすいわゆる「裏切り者史観」からまぬがれていませんでした。前掲書『ヒルファディングと現代資本主義』ではこうした「裏切り者史観」からすでに脱却をはかっていますが，本書第2部のもととなった連続論文「ヒルファディングの『組織された資本主義』論」（1977年～78年）はこうした姿勢で書かれています。しかし姿勢の上ではそうではあったものの，他方では学説史・思想史の見地から，資本主義のいわゆる「相対的安定期」の一資本主義観（一つの現代資本主義論）として，資料に即してヒルファディングの優れた個々の論点を浮き彫りにすることにも努めました。当時我が国ではワイマール期のヒルファディングを研究する意義がまだあまり認められていませんでしたから，あえてヒルファディングの積極的意義を強調し宣伝する必要もありました。その甲斐があったのか，1980年前後に宇野派を中心に展開された現代資本主義論の方法論争

でわたしの論文が，論客のひとりであった故加藤栄一氏の目にとまりました。

資料とテキストの解釈の点では古い論文と今でも，一部を除いてそれほど多くは変わっておらず，だから古い論文を本書の作成に「材料」として利用できました。しかし，ヒルファディング評価の観点や基準の点ではわたしは大きく変わっています。つまり，この点では，かつて否定的に評価していたもので本書において肯定的な評価に変わったものがかなりあります。本書の作成に利用した初期の論文の，ヒルファディングに対するレーニンを基準とした否定的な評価は，本書ではほとんど削除されています。

次に「現代と未来を照射するその理論的可能性」についてですが —— ここでは現代を現在に近い意味で用いている ——，ここでいう「理論的可能性」はあくまでも学説史の範囲でその理論的な意義と限界を問うことを意味します。学説史ですから，意義がなければ意義がないとしてもいいのです。ただ現代経済学史において評価をおこなうためには，現代資本主義に関するわたしの認識と現代資本主義論を示す必要がありました。だから本書の「あとがき」で「一つの現代資本主義論として『組織された資本主義』論を経済学史に位置づけるために，終章では現代資本主義論に関するわたしの考えを簡潔な形であるがあえて示した」(本書，397頁) と述べておきました。これは，ヒルファディングに関して学説史的な評価をおこなう上でわたしなりの基準を示すという意図を述べたものです。しかし，それとともに①わたしの現代資本主義論に対する評価と②太田仁樹氏がかつてわたしに対しておこなった「活学活用主義」という批判の問題が浮かび上がります。

Ⅶ　わたしの現代資本主義認識が「揺ら」いでおり，「皮相」？

コメントの指摘の一つにこういうものがあります。

「当時書かれたものを今日に問おうとすれば，現代への接合を加筆せざるを得なかったと思われるが，筆者のいう『現代資本主義』に揺らぎがあり（戦後資本主義を指すとしている一方で，リーマンショック前後のイメージで描かれていたりする），しかもその描き方が皮相なものとなっている」。

出版助成のコメントで，わたしの現代資本主義認識に「揺らぎ」があり，し

かもそれが「皮相」であると具体的な例もあげず，ここまで言うものだろうかと，最初は少し驚きました。現代資本主義という言葉は，学術的用語としてはあいまいですが，国家独占資本主義とか新帝国主義という言葉を用いたくないものですから，無難だからという理由でわたしも使用しています。通例現代資本主義とは，ロシア革命後の資本主義か第一次大戦後の資本主義，あるいは第二次大戦後の資本主義のことを指しています。「現代資本主義論の視座」に立つという意味は，ヒルファディングの「組織された資本主義」論を現代資本主義論の初期的な理論としてその特徴をとらえ，これがどのようにして生まれたのかを「帝国主義論から現代資本主義論へ」の展開において示すことです。これが本書の骨格と内容をなしています。さらにはそれにとどまらず，本格的に展開される第二次大戦後の現代資本主義論の見地に立って学説史的な意義と限界を明らかにすることをも意味します。これが本書に彩りを与えています。だからわたしは現代資本主義の歴史的発展を長いタイムスパンで考えているのであり，その一環として最近の発展局面にも若干言及しています。

この点，わたしは「リーマンショック前後」で時期区分する考えはまったくありません。「リーマンショック前後」はむしろ1980年代に始まり，1990年代に盛んに言われるようになったグローバリゼーションの時期の一つの帰結だととらえることができましょう。しかしこれも第二次大戦後の現代資本主義の一つの発展局面として位置づけられます。だから，わたしが現代資本主義とは戦後資本主義のことかあるいはリーマンショック前後のことをさすのか「揺ら」いでいるという指摘が生ずるとは思ってもいませんでした。しかしこのような批判が生じないように，終章の(2)のはじめでは現代資本主義の時期区分について書いてあります。本書のこの部分を見た読者で，何で時期区分の問題にこれだけこだわっているのか疑問を感じた方がおられるかも知れません。それには以上の理由があったのです。

現代資本主義に関するわたしのとらえ方を，何をもって「皮相」であるとしているのか，具体的な指摘がないのでわかりません。あるいは，1980年代にはじまり1990年代に開花したグローバリゼーションのイデオロギー的基礎に新自由主義を見いだし，グローバリゼーションに市場経済化・自由化の傾向を見いだしている点をさしているのでしょうか。冷戦体制終了，そして利

潤と効率を自由に追求するメガ・コンペティションの傾向を強調する形で，わたしは拙著『グローバリズムの幻影 —— 市場崇拝と格差社会の経済学批判 ——』(梓出版社，2006年)ですでにグローバリゼーションに関して簡潔に明らかにしています。ちなみにこの本は，今日の国際金融危機をある程度予期しています。応募原稿と本書では，この点，「ヒルファディング流にいえば」と断りつつ，1980年代以前の資本主義については資本主義の組織化の進展，以後については組織化の後退の時期であると言うことができるとして，この組織化の後退の結果として資本主義本来の無規律性(無政府性)が露呈した事実を指摘しました。このことが「皮相」という決めつけの理由となったのでしょうか。こう述べてきて，かつて保住敏彦氏が現代における「組織資本主義」状況の現出を指摘していたことを思い出しました。わたしの考えは，この保住氏の見解と似ています。また「組織化」の問題は資本主義の歴史的発展をとらえる上で重要なのではありませんか。

わたしの現代資本主義認識について少し話しましょう。わたしは，現代資本主義とは，独占資本とりわけ巨大独占資本を支配的資本とし，国家を単なる「つっかえ棒」としてではなく経済に「制度」的に組み込んだ資本主義であると考えます。支配的な資本は，金融資本ではなく，多国籍企業化した巨大独占資本(独占的産業資本と独占的銀行資本)を頂点とする独占資本です。この独占資本の支配下での諸資本の競争と蓄積運動が基本的には景気循環を描きつつ成長する現代資本主義のダイナミックな発展をもたらす。また技術革新と新産業の形成をもたらし，独占体制の発展と変化(一般化，巨大化，重層化，世界化)を生み，労使関係，企業形態，生産様式，経営様式，生活様式の変化を生みだしていく。貨幣資本の運動が生産実体から大幅に乖離し，投機が幅をきかせることも，現代資本主義の重要な特徴として指摘できます。

終章の(2)で示しておいた現代資本主義に関するわたしのこの見解は何も目新しいものではないのかも知れません。独占資本主義をベースとする点ではレーニンいらいのことですし，金融資本ではなく独占資本を支配的資本する考えもすでにスウィージーが唱えています。ただ独占と独占資本をベースとするわたしの考えは比較的早い時期から確定しており，初期の論文にも貫いているということだけことわっておきます。本書で新しいのは，わたしが独

占資本下に展開される諸資本の競争と蓄積運動を現代資本主義分析の「要」としていることです。「革新的企業家」などではなく，これを「要」にすることによって現代における景気循環を論じ，技術革新，労使関係，生産様式（コンビナート化とかフォードシステム）や生活様式（たとえばアメリカンウェーブ）などの点における現代資本主義の変化と発展，それに財政危機や環境危機などを引き起こすその歴史的制限性を説こうと考えました。

本書で示したわたしの現代資本主義認識と現代資本主義論は，本書が広く読まれるならば，現代資本主義論においては種々の解釈がありますから，おそらく様々な批判を浴び，これが本書に対する評価にも影響を与えるだろうと覚悟しております。しかし「皮相」とまで言われる筋合いのものではないと思います。この現代資本主義認識からすれば，わたしが「投機の死」とか「競争の止揚」傾向を一方的に主張するヒルファディング理論を現代資本主義論として手放しに評価しているのではないということがはっきりとしています。むしろ自己の「認識水準」に立って，学説史的に，その枠内でヒルファディング理論の意義と限界を指摘する姿勢を示していることがわかります。この点，繰り返し確認しておくと，とくに「組織された資本主義」論については，第二次大戦前のヒルファディングという歴史的な対象を取り扱っているのですから，わたしの古い論文も本書でも対象の「時代的制約性」を踏まえて史実に即して詳細に検討した上で，一つの現代資本主義論として現代と未来を照射する理論的可能性があるのだろうかと，あらためてその意義と限界を学説史的に説いているのです。

なお，現代資本主義論としての学説史的評価の点では，わたしが，ヒルファディング理論を資本主義のコントロールが可能であるとする，現代資本主義論における「組織資本主義」論の系譜として，ケインズ理論と並んでヒルファディング理論を位置づけているということも申し添えておきます。

Ⅷ　活学活用主義？

つぎに「活学活用主義」についてですが，おもしろいと思ったのは，コメントがこう述べていることです。

「テキスト解釈論，ないし経済思想史論に徹したものとして書かれればそれはそれとして学術的意義はあると思われる」。

これは拙著が出版の今日的「意義」はないが，「それはそれとして学術的意義」をめざすことができたという指摘だと思います。この指摘を見て，わたしの「活学活用主義」を批判する太田氏の顔を失礼ながら思い浮かべました。もっともコメントは，現代の視点，しかも「揺ら」いだ，「皮相」な現代資本主義認識に立って論じたことが，拙著の「学術的意義」を損ない，拙著をだめにしたという意味で述べています。さすがに太田氏もここまでは言わず，それはそれとして学説史・思想史研究の一スタイルとして，批判的だが認めることになるのではないでしょうか。

じつはわたしは，昔から太田氏に「活学活用主義」と批判されるほど，現代資本主義と社会変革に関する自己の認識に照らしてヒルファディングを評価する姿勢を示しているということも事実です。わたしは資料，史実に即して経済学史的研究をおこなうことに努める一方で，学説史・思想史研究の立場を離れて敢えて言うならば，自己の現代資本主義論の形成のためにヒルファディングを利用するという意図ももっています。ヒルファディングのみならず，マルクスやケインズそれにガルブレイスも，自己の現代資本主義論の構築に利用できるものは利用するというプラグマティズムの立場に立っています。そして，経済学史・思想史研究においても先に述べた「二重の視点」の一つにおいて，その時々に達成している自己の理論的「認識水準」を評価の基準としているものですから，太田氏の言う「活学活用主義」という批判が生じました。

「活学活用主義」という太田氏の批判は，その言葉の響きが悪いにしても，学説史・思想史研究を発表する上で現代の視点（現在の認識水準）にわたしが立っているということではそのとおりだと思います。むしろ，それで何が悪いのだとわたしは居直っています。太田氏がよく使う「労働者特権論」という言葉についても，わたしは現代の問題意識から生じたものであると判断しております。わたしは，解釈のための解釈は，訓古学だと思うのです。どんなに資料に精密に取り組んだ研究も，ぼう大な資料と史実を取捨選別し，どこ

に重要性を見いだすかという判断については，研究者の立場と観点に影響されています。「史実主義的」とも言えるほど資料に綿密にあたっている黒滝正昭氏の著書『ルードルフ・ヒルファディングの理論的遺産』(近代文藝社，1995年)も，1929年恐慌に「戦争の清算」を見いだすヒルファディングの見解の意義を強調するとき，氏の現代資本主義認識とのかかわりでそう強調しているものと思われます。だから，我々が戒めるべき点は，現代の視点に立って，とくに「政治主義的色眼鏡」で見て，史実と資料の解釈を歪め，テキスト解釈を歪めることではないでしょうか。

Ⅸ　『金融資本論』解釈における「上条理論」と本書のプロット

これもおもしろいことですが，例のコメントは，テキスト解釈を強調する割には，テキスト解釈としての「上条理論」には注目しておりません。ヒルファディングに関するこんな細かな解釈論議はあまり意味がないと考えたのでしょうか。おそらくどこにそのオリジナリティがあるのか，わからなかったのかも知れません。一般の読者にしてもそうでしょう。だからコメントの指摘を受けて，終章の(1)は完全に応募原稿のものと差し替え，ヒルファディング解釈の「上条理論」なるものを列挙したものになっています。このようにコメントの指摘を受けて，だいぶ本書を改善しています。「上条理論」については，これをここではいちいち細かく取り上げませんが，とくに本書第1部で倉田稔氏，黒滝正昭氏，保住敏彦氏，河野裕康氏，故星野中氏など名だたるヒルファディング研究者の「テキスト解釈」をなで斬りにしていますので，少し物議をかもしだすかも知れません。

ここで強調したいのは，わたしのヒルファディング解釈のオリジナリティが「現代資本主義論の視座に立った学説史」という観点から生じていることです。第一次大戦にいたる帝国主義論史という単に狭い視野に立った「テキスト解釈」では「上条理論」は出てきません。わたしの『金融資本論』解釈もその多くは後年の「組織された資本主義」論から逆照射する形で形成されています。

本書全体の叙述展開は，もちろん「帝国主義論から現代資本主義論へ」という視角にそっていますが，より細かく見ると，3つのプロットに分かれます。

第一に，経済政策論の方法と性格を確認することからはじまって（第1章第1節），『金融資本論』におけるヒルファディングの経済政策論そのものを検討して（第4章），最後に現代資本主義論として「現実主義的平和主義」論（第7章）を取り上げる政策論のプロットです。第二に，ヒルファディングの「資本主義の組織化」論の理論的根源を探り（第1章第3節），金融資本概念（第2章），恐慌論（第3章）の検討をへて，第5章の「組織された資本主義」論にいたる「組織化論」のプロットです。第三に，前掲の別著のメインテーマをなしていましたから本書ではプロセスについて詳しく取り上げませんでしたが，ヒルファディングが挫折と困難にぶつかり社会変革の見とおしをどのように修正していったかという，いわば「危機→革命」説からの転換のプロットであり，これが「組織された資本主義」論として「経済民主主義」論（第6章）に結びついていきます。

一つの現代資本主義論としての後年の「組織された資本主義」論から逆照射して形成されたこうした3つのプロットが織りなし本書の叙述展開を特徴づけ，また「上条理論」の成り立ちを示しています。「現代資本主義論の視座」に立たず，『金融資本論』に視野を限定した狭い「テキスト解釈」に徹していれば，「テキスト解釈」としての「上条理論」も出てきません。また「組織された資本主義」論にしても，両大戦間期の理論という性格からして，学説史的研究においても，テキスト解釈をおこなう上でも，第二次大戦後資本主義とのかかわりで現代資本主義論の一学説としてその理論的特質が浮かびあがると言っても過言ではありません。

X　「接合」の「難」とか「違和感」で思い当たること

これまで述べてきましたように，わたしは，第一次大戦後の資本主義を広い意味での現代資本主義だととらえ，この観点からヒルファディングの「組織された資本主義」論を一つの現代資本主義論であると学説史的に考えています。だから，本書でも資本主義の「相対的安定期」の一資本主義観としてこれをまず学説史的にとらえ，さらに未来を照射するその理論的可能性を問うという姿勢を示しています。理論的可能性を問うとは，学説史的にその意義と

限界を探ることです。例のコメントは，わたしが「皮相」なわたしの現代認識，「現代資本主義」認識にヒルファディングを「接合」して，ヒルファディングの現代的妥当性を強調しているかのように誤解しています。ただ，「接合」の難とか叙述の破綻を示す誤解がどうして出てきたのかをよく考えてみて思い当たる節があったことも述べておかなければなりません。コメントがあったおかげで，わたしも，文章展開において応募原稿に「作品」として未完成な点があることに気がつきました。もちろん古い論文と新しい論文を「接合」する難のことではありません。じつは本書は，「現代資本主義論の視座に立った学説史」と銘打ち，また時代的な制約を超えて現代と未来を照射する理論的な可能性を問題としたために，次のことが深刻に問われました。

そもそも現代資本主義とは何か，あるいは現代資本主義論はどう構築されるべきか，こうした現代資本主義論からすればヒルファディングが学説史的にどう評価されるべきか。また現代の先進国における社会変革の視点からヒルファディングの社会化論や経済民主主義論は思想史的にどう評価されるべきか。さらには資本主義の歴史区分の２段階説（産業資本主義と現代資本主義）に立ち，帝国主義をその過渡的段階とみなすわたしの視点から，帝国主義論と帝国主義論史の評価の基準はどのようなものになるか。

たとえこれまで基本線をつかんでいたとしても，経済学史研究の基準を求めてわたしの認識水準をいっそう深化させる上で，これらすべてはわたしにとって難問です。現代資本主義論に関して定説がなく，種々の見解があるなかで，わたしはこれらすべてについて自分の頭で考えるしかありませんでした。本書の執筆は，「現代資本主義論の視座」の点では苦闘の連続でした。応募原稿では，第２部における２，3の節および最終章でこの苦闘の痕跡が残っており，それが文章展開を少しくどくしており，またヒルファディング研究の範囲を少し超える叙述もわずかながらありました。最初に示したコメント文に分量削減などの要求が指摘されており，応募原稿が必ずしも完全なる完成原稿として位置づけられているものではなく，また改善することそれ自体は困難ではありません。だから，それはそうとして改善点として指摘してくれればよかったのですが，コメント文を書いた者に，この点，拙著の致命的な破綻あるいは弱点として突かれたと推察します。本書では，分量削減の目

標もあって，こうした思考のプロセス，苦闘の痕跡をほとんど消し去りました。本書では得られた結論のみがあっさりと述べてあり，叙述のつながりもよりよくなっています。それによってかなり読みやすくなったのですが，逆に削除されたこの苦闘の痕跡に興味をもつ方もおり，削除を残念に思う方もいるかも知れません。

たとえば，応募原稿で述べていた帝国主義論史の基準に関する部分は，叙述を整理し，分量を削減する都合上大部分削除しています。また，拙著でも触れていますが，応募原稿ではより詳しく，ヒルファディング理論が方法論的にも故宇野弘蔵氏の理論と非常によく似ているという事実を指摘しています。拙著は，宇野理論とヒルファディングの関係をかなり意識して書かれたものです。ここであえて拙著を簡単に補足しておくならば，景気循環論で終わるヒルファディングの理論経済学は，それそのものとしては資本主義の永遠の景気循環を述べることで，宇野氏の原理論の性格に似ています。ただし理論経済学におけるヒルファディングの資本主義の組織化・社会化論は，社会主義の物質的基盤を準備すると位置づけられている点で，宇野原理論とは異なっています。ヒルファディングは，社会主義と階級闘争，社会構成体の歴史的移行，社会変革の問題を経済政策論の課題をなすとして，理論経済学の外に追いやっています。これも唯物史観をイデオロギーとして原理論から追いやる宇野氏の見解を彷彿とさせます。もっともヒルファディングは，唯物史観を科学と見て，社会主義を科学づけるものと評価している点では，宇野氏の見解とは異なっていることも指摘しておかなければなりません。いずれにしても理論経済学と経済政策論というヒルファディングの分け方を見て，原理論と段階論（経済政策論）に分ける宇野氏の見解を思わないではいられませんでした。

XI　本書の出版意義について

以上，出版助成不採用通知のコメント文を素材にして，自著について語ってきました。本書の内容はぼう大で多岐にわたり，とてもこのリプライ原稿では語りきれないと思ったので敢えて具体的な内容には立ち入りませんでし

た。最後にやはり本書の出版意義を問う仕事が残されています。専門書として一定市販の要件を満たしているが，残念ながら本書が爆発的に売れるという状況になっていないと思うので，この任務は重要だと考えます。

例のコメントでは批判を浴びましたが，著者の目から見て本書の長所は，「現代資本主義論の視座」に立った学説史研究，つまり「帝国主義論から現代資本主義論へ」というテーマのもとに統一した研究をなしていて，プロットのおもしろさを示しつつ，若きヒルファディングから中後期ヒルファディングへの展開を「上条理論」によって「謎解き」をしていることにあります。簡潔に示したわたしの現代資本主義論が何も目新しいものでなく，むしろ批判の対象をなすにすぎないと考える読者にしても，これまでの我が国におけるヒルファディング研究史を十分に踏まえ，諸研究と格闘することによって「上条理論」を形成し，そのことによってヒルファディングの理論的・思想的歩みの「謎」を解明する本書の試みには興味を覚えていただけるものと信じています。本書ではこれまでのわたしの研究に新たに付け加えた資料はほんにわずかなものです。むしろ「上条理論」なるヒルファディング解釈の視点の体系化，「帝国主義論から現代資本主義論へ」という統一的テーマで一貫して論ずるストーリーのおもしろみが本書の魅力です。本書が対象としたのは，ヒルファディングという人物をめぐってですが，「主題として限定的」という例のコメントの評価とは裏腹に，わたしの経済学の全知識，いや社会科学の全知識が問われる広大な領域でした。それだけに本書の作成は，知的緊張をはらみ，やりがいのあるものでした。おそらく「上条理論」なるもの，個々の細かい解釈，現代資本主義論の視点，社会変革に関する考えが報告と議論の対象となると考えています。

わたしが本書を書き，多くの方に読んでいただきたい理由は，我が国におけるマルクス経済学研究の現状を憂えるからです。大学の人事について見ても，大学経済学部の人事構成上いくらマルクス経済学が衰退したといっても，一人くらいはマルクス経済学の理論研究の将来を託せる若手研究者を採用したいと思っても，この後継研究者がなかなか育っていないという現実にぶつからざるをえません。とりわけ現代資本主義論を語れる若手マルクス経済学者は稀少価値をもっているとさえ言えます。

本書の「はじめに」でも書きましたが，昨今の国際金融危機は，「マルクス回帰」(『資本論』回帰)の一現象を生みました。悲しむべきは，マルクス経済学の帝国主義論そして現代資本主義論へ注目が集まるのではなく，「マルクス回帰」という結果になっていることです。わたしは，その理由が，マルクス経済学が魅力ある現代資本主義論の体系を示し得ていないということにあると思います。それで自分が現代資本主義論を構築するとすればどういうものを形成するのであろうかと考えてみました。本書では，この理論的苦闘の痕跡を消し去りましたが，じつはヒルファディングとともに「わたしの現代資本主義論」の構想を考えていたのです。そして得た結論の一つは，ヒルファディングが企てたのと同様に，労働価値説に基づいて商品，貨幣，資本を再考し，その現代的形態を問い，独占体制下での諸資本の競争と蓄積運動を要とする現代資本主義論体系を構築する必要があるということです。こう言えば，すぐに資本論，帝国主義論，現代資本主義論の段階区分を取り払う，古くからある論理の「連続説」にすぎないではないかという批判が出てくることも十分に承知しております。しかしわたしにはマルクス的な現代資本主義論体系の理論的内容の乏しさ，魅力のなさは，この段階区分から生じているとしか思えません。

もう一つ問題があります。社会変革の問題に関していったいどう考えたらいいのだろうかという問題です。とくに近年国際金融・経済危機のみならず財政危機や環境危機などこれだけ資本主義の矛盾が露呈し，社会に重大な問題を投げかけているのに，なかなか出口が見えず，事態の打開のために強い指導者を求めて人々はポピュリズム，ファシズムに向かうのではないかと思われるほど混迷した事態となっています。一般においては社会主義の魅力が失われていますが，わたしは，マルクス主義あるいはマルクス主義以外の社会主義の思想を歴史的に再考するなかで，現代社会の改善の方向性を示すのに有効な社会主義とは何かをあらためて問う必要があると考えています。とくにマルクス主義についてわたしは，経済と社会の問題の解決策を求める者は，レーニンを「基準」としてオーストロ・マルクス主義などを「異端のマルクス主義」として批判の対象としたりするのではなく，またレーニンの権威が失墜した時にマルクス以後のマルクス主義の歴史に「沈黙」するのではなく，き

ちんと過去の歴史を客観的に総括すべきだと思うのです。この点，両大戦間期における代表的な社会民主主義理論家として，労働者の「体制順応傾向」に突き当たり，先進国おける社会変革の困難にぶつかりながら，社会化論から経済民主主義論へと歩むなかで自己の社会主義構想を具体的に再考し，さらにはファシズムに敗れて「社会主義＝歴史的必然」論を放棄するにいたったヒルファディングの苦難に満ちた歩みは興味が尽きません。マルクス主義の歴史の再考をとおして経済と社会の問題の解決策を探ろうと考えている人々にはぜひ本書を読んでいただきたいと思います*。

＊　わたしは「異端のマルクス主義と西欧社会民主主義の源流 ―― R. ヒルファディングとO. バウアーにもっと注目を ――」（北海道雇用経済研究機構『Heero Report』No. 118, 2011年６月）というエッセイで，この辺のことを述べています。

【付記】

第３セッションは，３月29日の午後１時半からはじまった。相田愼一氏の司会のもとに，倉田氏の著作に関して内田氏，拙著に関して恒木氏，中田氏の著作に関して河西氏が順次報告をおこなった。質疑応答は，ほとんど拙著に集中した。良く受け取るとすれば，それだけ興味深い論点を提供したと解することができ，悪く受け取るとすれば，それだけ隙があったということになるであろう。報告と質疑応答では個別的論点が取り上げられ，ヒルファディング研究の視点については問題とならなかった。その結果，リプライ用に用意した本原稿は残念ながら研究会でほとんど活用できなかった。研究会では質問攻めへの対応で余裕がなく，個々の質問について記憶は定かではない。あいまいな記憶に基づいてではあるが，拙著に関する質問ないし意見で印象に残ったものをまとめると，こうである。

第一に，著者はマルクス主義思想史の文脈で語るのみでなく，たとえばゾンバルト，ウェーバー，ラーテナウなどの同時代の非マルクス主義者との「同時代的比較」のなかでヒルファディングを位置づけるべきである。これは報告者の恒木氏によって提起された。小林純氏は，同様の主旨から，著者は「ヒルファディングの箱庭」にこもるべきではないと意見を述べた。これはマルクス主義思想史の見直しという拙著，ただでさえ分量の多い拙著のテーマをはる

かに超えるものである，今後の課題としたいと，わたしは答えた。

第二に，以上の意見に関連して，小林純氏が拙著におけるケインズの取り扱いについて史実的に不正確であると指摘している。これに答える時間的な余裕が与えられなかったので，ここで述べておこう。小林氏の指摘は，1924年の時点でヒルファディングがケインズに注目したという拙著の記述をめぐってのことだと思われる。拙著ではケインズのどの著作にヒルファディングが注目したのか確証できなかったので明記しなかったが，時期的に見ておそらく1923年の『貨幣改革論』だと思われる。

第三に，恒木氏は，「組織された資本主義」論を評価するにあたって，当時の具体的な事例と関連づける必要があるのではなかろうかと提唱する。そしてその事例として1920年のキールでの電力業における労働争議と後のこれに関する判決を取り上げ，これにヒルファディングはいかなる態度を示したかと問う。拙著では，ヒルファディングの「組織された資本主義・経済民主主義」論が当時のドイツ合理化運動に労働者側から協力する上での指針を示したものであること，また彼の「現実主義的平和主義」政策がシュトレーゼマン外交と軌を一にするものであることを示した。恒木氏はこれでは不十分であり，もっと個々の具体的事例に取り組むべきであるという意見である。これに対しては，わたしは1920年の労働争議問題に関するヒルファディングの考えに関しては，資料的な確証が難しいと答えた。

第四に，「組織された資本主義」論における「中小農民保護」については，19世紀末のシェーランク，フォルマール，ダーフィットらの提起に触れる必要があるという意見が出た。わたしは，こう答える。19世紀末に修正主義論争の一環として中小農保護について論争があったことは我が国の思想史研究でも取り上げられてきた。この論争で正統派カウツキーの「農民の両極分解説」がSPD内で支持され，中小農保護政策が退けられたことは本書でも指摘したとおりである。ところが1920年代中ごろオーストリアではオットー・バウアー，ドイツではヒルファディングが農業では資本の集中法則が妥当しないと主張し，「農民の両極分解説」が否定され，カウツキーの見解は退けられた。それとともにSPÖのウィーン農業綱領とSPDのキール農業綱領で中小農保護政策が採用されるにいたった。この辺の事情を明らかにしたことに拙著の意義が

ある。

第五に，小林純氏が，ヒルファディングの言う，加工業の立場に立った自由貿易政策は，何も特別なことではなく，敗戦国ドイツの当時の事情から自明であったのではないかという意見を述べた。これに対して，わたしはむしろ当時は保護主義的傾向が現実を支配していたと反論した。

第六に，保住敏彦氏が拙著をこう批判する。『金融資本論』におけるヒルファディングの「帝国主義」論を経済政策論の観点から理解するというが，個々の政策を個々の利害から説明するというのでは，段階認識と段階区分が欠け落ちて，改良的な立場から評価することになるのではないだろうか。ヒルファディングは，帝国主義が社会主義の前夜，前段階であると主張しており，段階認識を明確に持っていた。なお，保住氏は，『金融資本論』と「組織された資本主義」論の理論的連続性を認めることにはやぶさかではないが，後者がベルンシュタインに接近したという意味で立場の転換に基づくものであると言うべきであるということを強調していた。

その他に，ヒルファディングのいう弁証法とは何を意味するのか（河野裕康氏），理論と歴史との関係で言えば，金融資本が成り立たなくなるとすれば，現代経済学はどうなるのか（黒滝正昭氏）などの質問があった。1時間ほどの質疑応答で拙著に議論が集中し，保住氏による批判を含めて，最後の方では質問・批判に答える時間がなかったほどである。